

「ハヌカの祭り」の今日的意義

—神への献身、心新たに—

ベレーシート

●「ハヌカの祭り」は別名「光の祭典」とも呼ばれますが、この祭りの由来は「光」とは何の関係もありません。この祭りの歴史的背景を記した「マカバイ記」(上下)の中には、「光」についての言及はひとつもありません。むしろこの祭りは、ギリシアの王アンティオコス 4 世エピファネスによって汚された神殿をきよめて、神に再奉獻した出来事であることが分かります。ですから、「光の祭典」とあるのは伝説の域を出ないことが分かります。しかし瞑想を続ける中で、「ハヌカの祭り」が示唆していることは、やはり「光」と大いに関係があるのだと考えるようになりました。つまりこの祭りが真に示唆していることは、神のヴィジョンである神の家(神殿)についての理解を深めるためには、上からの光をより多く必要としているということです。

●神殿には金で出来た七つの枝を持った燭台「メノーラー」(מְנוֹרָה)が置かれていますが、「ハヌカの祭り」で用いられる燭台は九つの枝で出来た「ハヌキヤー」と呼ばれる燭台で、ハヌカの祭りにしか使われない、いわば期間限定使用の燭台なのです。9 本ある蠟燭のうち、8 本は正規の蠟燭ですが、あとの 1 本は火種としての蠟燭です。八日間にわたる祭りにおいて第一日目は 1 本、第二日目は 2 本・・・と、日を追うごとに蠟燭に灯される蠟燭の火の数で明るさは増し、祭りの最終日にはすべての蠟燭が灯されることとなります。このことを別の視点から見ると、「ハヌキヤー」は、奥義としての神のご計画の悟りが、終わりの日が近づくにつれて、時の経過と共に光の量が増し加えられて開示され、やがて八日目には、神のご計画の全体が完成するという預言的なしるしとしての燭台とも言えます。そのようにこの祭りを理解するならば、この時期に静まって瞑想することはきわめて意義のあることだと考えます。「ハヌカの祭り」の八日間の瞑想を試みたその結論として、「ハヌカにおける三つの瞑想テーマ」を、瞑想の指針として提起したいと思います。以下に掲げる瞑想テーマを毎年継続することで、キリストの花嫁である教会が整えられていくと信じます。



1. ヘレニズムとヘブライズムの相克
2. 家庭教育における信仰の継承という大事業
3. 聖書的献身の再吟味

1. ヘレニズムとヘブライズムの相克

●ギリシアの支配下に置かれたユダヤ人たちは、バビロン捕囚時代やメディア・ペルシア時代とは異なる危機にさらされることになります。その危機とはヘレニズム文化が強要されたことです。それはユダヤ人の存在のアイデンティティーを根底から否定されるという危機でした。つまり、反ユダヤ主義の台頭です。

バビロン	ペルシア	ギリシア
<ul style="list-style-type: none"> ●捕囚という憂き目もたらした祝福は、神のトーラーに対する開眼。 ●二代・三代を通して「トーラーライフスタイル」が確立された。 	<ul style="list-style-type: none"> ●ユダヤ人をサポートする政策が取られたことで、エルサレムに神殿が再建された。 ●ハマンによるユダヤ人絶命計画からも守られた。 	<ul style="list-style-type: none"> ●最初はそれぞれの民族の宗教に対して柔軟であったが、ある時期からユダヤ人の神殿を汚し、ヘレニズム化が強力に推進されたことで、ユダヤ人が二分された。

●マカバイ記上 1 章 10 節に「そしてついには彼らの中から悪の元凶、アンティオコス・エピファネスが現れた。」とあります。ヘブル語では「彼らの中から」とは、ペルシア帝国を打ち倒して世界を征服したマケドニア(つまりギリシア、では「ヤワン」と称されます)のアレキサンダー大王とその武將たちとその子孫からという意味です。その中から「悪の元凶、アンティオコス・エピファネス」が現れたのです。「エピファネス」とは「現人神」という意味ですが、アンティオコス 4 世は自分を呼ぶ呼称として「エピファネス」と呼ばせていたようです。しかしユダヤ人は「エピマネス」(気違い)と陰口をたたいていたと言われます。

●「悪の元凶」は新共同訳の訳語ですが、フランシスコ会訳は「一本の罪深い芽」、バレルバロ訳は「悪の根」と訳しています。それは彼がユダヤ人たちやエルサレムを武力でヘレニズム(人間中心主義)化させようとしたことを意味しています。しかも、それに従わない者を死刑にしたのです。そのために、「こうして彼らは異邦人の流儀に従ってエルサレムに錬成場(=体育館、競技場)を建て、割礼の跡を消し、聖なる契約を離れ、異邦人と軛を共にし、悪に身を引き渡した。」(1:14~15)とあります。エルサレムがヘレニズム化された都となるためには、錬成場(=体育館、競技場)を築くことは必要条件であったようです。当時の競技は裸でなされたために、すでに割礼を受けていた者は特別な手術で無割礼の状態に戻したようです。また、割礼を受けないことはユダヤ教の放棄を明らかにすることでした。アンティオコス 4 世エピファネスは、すべての人々が一つの民族となるために、おのおの自分の慣習を捨てるように、勅令を発しました。彼がしたことをまとめてみると、以下のようになります。

- (1) 安息日を汚したこと。
- (2) 主の例祭と聖なる日を汚したこと。
- (3) ギリシアの偶像(ゼウス)を祭壇に置いて拝ませたこと。
- (4) 祭壇には豚の血をささげたこと。
- (5) 聖書で禁じている不浄な食べ物を食べさせたこと。
- (6) 割礼を禁じたこと。
- (7) トーラーの学びを禁じた。

●上記の内容に違反した者はすべて死刑に処しました。このようにして神を拜むユダヤ人を徹底的に迫害したのです。またユダヤ人の中にはギリシアと手を結ぶ者たちがいたことも事実です。ヘレニズム化が推し進められたことで、ユダヤ人が二分されたのです。これはバビロン時代にも、メディア・ペルシア時代にも見られないことでした。このような迫害を私たちはどのように思うでしょうか。キリスト教の歴史において、このアンティオコス4世・エピファネスと同様なことをしてきた者たちがいます。それはローマ・カトリック教会です。ユダヤ人を排斥し、彼らの社会的地位を剥奪し、彼らの伝統とそのルーツを断ち切り、世界に離散させた反ユダヤ主義です。これが置換神学を生み出しました。

●ヘレニズムは今や全世界に浸透している人間中心の文化です。このヘレニズムと対抗するのが神中心のヘブライズムです。思惟概念の相克です。使徒パウロは前者を「この世の知恵」と呼び、後者を「神の知恵」と呼んでいます。この両者には何のつながりも、まじわりも、調和も、かかわりも、一致もないことを強調し、「つり合わぬくびきをいっしょにつけてはならない」と述べています(Ⅱコリント6:14~18)。これはやみと光との衝突であり、御国が完全に到来する日まで続くのです。マカバイ記はこのテーマを扱っている書だと言えます。その視点から「ハヌカの祭り」を考えるなら、単なるユダヤの祭りの域を超えた、神の民としての今日的課題を持った祭りとなり得ると信じます。

●ヘレニズムとヘブライズムとの相克(衝突)は、古くて新しい問題です。今日の教会においても、従来の置換神学からヘブル的視点による聖書解釈に目が開かれてきている現象は、ヘブライズムの台頭と言えます。マカバイによる勝利は、パレスティナ全域にヘブル語が主要言語となる契機となりました。以下は、「イエスはヘブライ語を話したか」(ダヴィッド・ビヴィン/ロイ・ブリザード/河合一充訳)の47頁からの引用です。

●紀元前167年、エルサレム神殿はシリアのセレウコス朝のアンティオコス四世エピファネスによって汚された。この直後に、ユダ・マカバイに率いられて、ユダヤ人はアンティオコスの圧政と暴虐な政策に対して反乱を起こした。この反乱はついに、紀元前164年の12月(キスレウの月)に神殿を回復し清めることに成功したが、明らかにこのことからユダヤ人の間に宗教的な復興が鼓舞された。マカバイによる勝利は、パレスティナ全域に父祖の言語であるヘブライ語が再び主要言語となっていくきっかけとなったのである。同様に、近代において、父祖の地に帰ってきたユダヤ人のためにどの言語を正式な国語とするかの戦いの中で勝利を得たのが、ヘブライ語であった。

2. 家庭教育における信仰の継承という大事業

●信仰の継承を目的としてスタートした「ヒナヤーフ・ミニストリー」(現在は連盟の「オール・キッズ・キャンプ」によって継続中)は、今日の教会において難事業であると同時に、優先度の高い大事業です。教会教育の前に家庭教育ありきなのですが、その部分が今や崩壊寸前の危機的状況なのです。

●マカバイ記を読む中で、アンティオコス 4 世エピファネスによるヘレニズム化への強要に対して強硬に対決したのは、マタティアという父とその 5 人の息子たちでした。ヘレニズム化に傾くユダヤ人が多く起こって来る中で、マタティアと 5 人の息子たちはそれに同調しなかった者たちを代表する一家でした。彼らはこの戦いのために最後は全員殉教しますが、彼らの戦いはまさにヘブライズムを継承する戦いであったと言えます。

●父マタティアの死期が近づいた時、彼が息子たちに語った訣別説教が光を放っています。「今は高慢とさげすみのはびこる、破滅と憤りの世だ。お前たちは律法に情熱を傾け、彼らの先祖の契約にいのちをかけよ。我らの先祖がそれぞれの時代になした業を思い起こせ。そうすればお前たちは、大いなる栄光と永遠の名を受け継ぐことになる」と言って、アブラハム、ヨセフ、ピネハス、ヨシュア、カレブ、ダビデ、エリヤ、「ハナンヤ、アザルヤ、ミヒヤエル」(おそらく、シャデラク、メシャク、アベデネゴのこと)、ダニエルといった信仰の勇者たちの名を挙げながら、マタティアは息子たちに遺言を言い残しました(マカバイ記上 2:61~68)。

- 61 それゆえ代々にわたって次のことを心に留めよ。神に希望をおく者は決して力を失うことはない。
- 62 罪人の言葉を恐れてはならない。彼の栄光など塵あくたや蛆虫に変わってしまうだろう。
- 63 彼は、今日は有頂天になっているが、明日には影すら見えなくなる。元の塵に戻り、そのはかりごとは消えさせる。
- 64 お前たちは、律法をよりどころとして雄々しく強くあれ。律法によってこそお前たちは栄誉を受けるのだ。
- 65 見よ、お前たちの兄弟シモンは知略にたけた男だ。いつも彼の言うことを聞け。シモンはお前たちの父となるであろう。
- 66 ユダ・マカバイは若年のころから剛の者である。彼を軍の指揮者として仰げ。彼は諸国民との戦いを戦い抜くであろう。
- 67 お前たちは、律法を実践する者全員を集め、民のために徹底的に復讐することを忘れるな。
- 68 異邦人たちには徹底的に仕返しし、律法の定めを固く守れ。」

●このマタティアの訣別説教(遺言)で教えられることが三つあります。

第一は、抛り所がこわされたなら、何もできないということを確認していたことです。

それゆえ息子たちに「律法をよりどころとして雄々しく強くあれ」と命じました。そして、神に希望をおく者は決して力を失うことはないとい力強い励ましを与えました。

第二は、人間の栄光とはかりごとは消え失せるということです。

それゆえ、「罪人のことばを恐れてはならない」と命じました。事実、アンティオコス 4 世エピファネスの栄光とそのはかりごとは消え失せました。

第三は、息子たちの賜物(リーダーとしての資質)を見抜いていたことです。

シモンは戦いの策士として、またユダは統率者としての資質を見抜いて、他の者はその二人に聞き従うよ

うに命じたのです。このような訣別説教を語ることでできる父親はずばらしいです。まさに箴言における「父」の姿を彷彿とさせます。このような主にある家庭教育が建て上げられていく必要があります。これは日本のキリスト教会における緊急の今日の緊急的課題ではないかと思えます。

3. 聖書的献身の再吟味

●マタティアが死んだ(おそらく病に倒れた)後、5人の息子たちの中の三男のユダが父の後を継ぎます。彼は意志強固で勇気のある有能な指導者であったことが、マカバイ記上 3~4 章を読むと分かります。4 章 38~59 節には、汚されたエルサレム(シオン)の神殿と祭壇をきよめて、再奉献したことが記されています。この「再奉献」こそ、「ハヌカの祭り」の由来となった出来事です。時は西暦 B.C.164 年(バビロニア式セレウコス暦、すなわち、マカバイ記に記されている暦では第 148 年)です。

●ちなみに、「ハヌカ」の祭りは、旧約聖書に記されている「主の例祭」には含まれていません。なぜなら、この祭りは旧約聖書がまとめられた後に起こった、マラキからイエシュアまでの「中間時代」と呼ばれる時期に実際に起こった歴史的出来事に由来するものだからです。「ハヌカの祭り」とイエシュアとの関係については、ヨハネの福音書 10 章 22~23 節に、「そのころ、エルサレムで、宮きよめの祭りがあった。時は冬であった。イエスは、宮の中で、ソロモンの廊を歩いておられた。」とあります。イエシュアの行動にはすべて御国に関する何かか隠されていると考えるのは自然です。

●新改訳は「ハヌカの祭り」のことを「宮きよめの祭り」と訳していますが、新共同訳は「神殿奉献記念祭」と訳しています。こちらの訳の方がこの祭りの内容をよく表わしていますが、正確を期すならば、「神殿再奉献記念」とすべきです。「再」という文字が「宮きよめ」とつながるからです。ギリシア語原文では「エンカイニア」(ἐγκαινία)となっており、それは「宮きよめ、再奉献」という意味です。冬の時期のこの祭りのために、イエシュアがエルサレムに行かれたことで、この祭りがイエシュアにとって重要な祭りであったことをうかがわせます。ここではイエシュアが神のヴィジョンである神の家(神殿)を建て上げるための使命を、再確認する時としてエルサレムに行かれたのではないかと推察します。

●「ハヌカ」の原語情報について。

「ハヌカー」(「ハヌッカー」**חֲנֻכָּה**)は「ハーナフ」(**חֲנֻךְ**)の名詞で、旧約では「奉献」という意味で 12 回使われています。動詞の「ハーナフ」(**חֲנַךְ**)は神殿のみならず、祭壇、新しい家、そして自分の子を主に献げることの意味します(申命記 20:5/ I 列王記 8:63/ II 歴代誌 7:5/箴言 22:6)。ちなみに、新しい家とあるのは新しい主にある家庭を主に献げることの意味であり、子を主に献げるとは子を主の道を歩むべくふさわしく教育(訓練)することを意味します。まさに「ハヌカ」の奉献の儀は、神の恵みによる主権的支配に対する感謝の献身の表明と言えます。

●「ハヌカの祭り」にはこうした信仰的献身の表明が含まれているにもかかわらず、イエシュアがこの世

に來られた時代の神殿は、祭司長を初めとする指導者たちが神のトラーの道から外れて、人間の教え(解釈)と制度化した宗教の中で安逸をむさぼっていた現実があります。それゆえ、「ハヌカ」の献身的精神はイエシュアの時代のみならず、いつの時代にも必要とされるものなのです。この献身的精神が発動される背景には、必ずと言ってよいほど指導者たちの靈的墮落があるのです。その意味において、この神殿再奉獻の出来事の今日的意義として、最後に、ローマ人への手紙 12 章 1～2 節にある使徒パウロのことばと関連させて考えてみたいと思います。今年から当教会の元旦礼拝のテーマを「ハヌカの祭り」にちなんで、「神への再献身」としていきたいと思います。

【新改訳 2017】ローマ書 12 章 1～2 節

- 1 ですから、兄弟たち、私は神のあわれみによって、あなたがたに勧めます。あなたがたのからだを、神に喜ばれる、聖なる生きたささげ物として献げなさい。それこそ、あなたがたにふさわしい礼拝です。
- 2 この世と調子を合わせてはいけません。むしろ、心を新たにすることで、自分を変えていただきなさい。そうすれば、神のみこころは何か、すなわち、何が良いことで、神に喜ばれ、完全であるのかを見分けるようになります。

【聖書協会共同訳】

- 1 こういうわけで、きょうだいたち、神の憐れみによってあなたがたに勧めます。自分の体を、神に喜ばれる聖なる生けるいけにえとして献げなさい。これこそ、あなたがたの理に敵った礼拝です。
- 2 あなたがたはこの世に倣ってはなりません。むしろ、心を新たにして自分を造り変えていただき、何が神の御心であるのか、何が善いことで、神に喜ばれ、また完全なことであるのかをわきまえるようになりなさい。

●12 章 1 節の主動詞は、「**勧めます**」と訳された「パラカレオー」(παρκαλέω)です。ここでパウロは何を勧めているのかと言えば、「あなたがたのからだを、献げること」です。「献げなさい」と一見命令形のような訳語になっていますが、ここでは動詞の不定詞として使われています。不定詞とは動詞を名詞化したもので、ここでは「献げること」となります。あとはそのことを説明する修飾的なことばが付随しています。つまり、1 節でパウロは**神への献身を勧めている**のです。しかも「献身」と「礼拝」とは同義です。献身なき礼拝はあり得ないという事になります。したがって、私たちはもう一度、自分のからだを神に献げるとはどういうことかを知らなければなりません。

●まず「献げる」という動詞「パリスターミ」(παρίστημι)は、「そばに」という意味の前置詞「パラ」(παρ)と「立つ」を意味する「イステーミ」(ίστημι)の合成語です。したがって神に献げるとは、「神のみそばに立つ」ことを意味します。あなたがたのからだを「神に喜ばれる聖なる生きたささげ物として」とは、自発的なささげ物として自らを神の前に立たせるということです。これこそが、まことの献身であり、「理に敵った」、靈的な礼拝なのだと思徒パウロは私たちに語っています。

●「献げる」ことに関連してもう一つ挙げておきたい箇所は、Ⅱテモテ 2 章 15 節です。

【新改訳 2017】Ⅱテモテ 2 章 15 節

あなたは務めにふさわしいと認められる人として、すなわち、真理のみことばをまっすぐに説き明かす、恥じることのない働き人として、自分を神に献げるように最善を尽くしなさい。

【新改訳改訂第 3 版】Ⅱテモテ 2 章 15 節

あなたは熟練した者、すなわち、真理のみことばをまっすぐに説き明かす、恥じることのない働き人として、自分を神にささげるよう、努め励みなさい。

●ここにもローマ書 12 章 1 節と同様に、「パリステーミ」(παρίστημι)という動詞の不定詞が使われています。ここでの主動詞は「努め励みなさい」(「熱心に努めなさい、最善を尽くしなさい」というアオリストの命令形です。アオリストの命令形は、ヘブル語の強意形のヒットパエル態に相当します。つまり、強制されてではなく、むしろ積極的に、主体的、自覚的、自発的に、これこれのことをせよ、という意味になります。

●パウロは「からだを献げること」を勧めているのですが、その内容として二つの命令形(消極的表現と積極的表現)で言い表しています。ひとつは「この世と調子を合わせてはいけません」という現在形の命令、もうひとつは「心を新たにすることで、自分を変えていただきなさい」という現在形の命令です。現在形の命令とは「常にし続けなさい」という意味です。「心を新たにするとありますが、ここでの「心」とは、心情や感情のことではありません。ギリシア語の「ヌース」(νοῦς)は、ヘブル語訳の「レーヴ」(לֵב)と同様、知性や考え、思考を意味します。つまり「思考を一新する」ことを意味します。思考の座標軸を神中心に移すことを意味します。みことばを時代精神によって解釈せずに、本来の神の概念をもってみことばを読み、そして解釈することを自分に課すことです。

●そのようにして聖書を読み、聖書を説き明かすことは、簡単なことではありません。地道な学びと継続的な積み上げが求められます。気合や一念発起の頑張りではできないことです。毎年、八又力の時期に(一年の終わりに、あるいは一年の始めに)、自らを吟味して、神に再献身する機会とするならば、「八又力の祭り」は大きな意義を持つてくると信じます。

2019.元旦礼拝

銘形 秀則